
Fate/stay night ~ その時聖杯に願うこと

石・丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / s t a y n i g h t 〽 その時聖杯に願うこと

【Nコード】

N 3 4 9 2 B A

【作者名】

石・丸

【あらすじ】

全てを終え眠りについたセイバー。しかし運命の悪戯か、目覚めた彼女の前に衛宮士郎の姿が。

いつか見た光景に戸惑いながらも、彼女は彼に問いかける。

「——問おう。貴方が、私のマスターか」

聖杯戦争再構成。セイバー逆行もの。

(arcadia様に投稿した作品の加筆、修正verになります)

第一話

「ちょいとばかり驚かされもしたが——もしかしたら、お前が最後のマスターだったのかもな？」

「……マスター？」

薄く靄がかかったような思考の中に声が響く。しかし、そんなものに頓着している暇など私にはない。

何故なら、今まさに彼は“敵”に命を奪われようとしているからだ。

翻る真紅の槍。その切っ先は、真っ直ぐに彼の心臓へと向いている。

逡巡する間などありはしない。私は魔法陣から出るや、彼へと迫る閃光のような一撃を力の限り打ち弾いた。

瞬間、腕に伝わる激しい衝撃。

宝具通しのぶつかり合いは、目も眩むばかりの魔力の発光を促し、その光で薄暗い土蔵が明るくなった。

「——本気が、七人目のサーヴァントだと……!?!」

態勢を整えている暇はない。私はそのまま流れるように踏み込むと、槍を構えた男へ叩き付けるような一撃を放った。

槍を携えた男——ランサーは、手にした槍の腹で一撃を捌くも、衝撃に押され僅かに態勢を崩す。

「チッ——!」

軽く舌打ちをしながら、ランサーが後退する。

それは神速の如き素早さで、ランサーは私が一息も吐かないうちに土蔵の外へと身を躍らせていた。

しかし、これで彼の命を救うという当初の目的は達せられた。

私は油断なく外のランサーを牽制しながら、ゆっくりと背後にいるだろう人物を振り返った。

——覚えている。

とても風の強い日だった。

あの日と同じ月明かりが、まるで銀光のように土蔵へと射し込み、私と目の前で屍餅を付いている少年を照らしている。

「——」

彼は驚いたように呆けながら、声も無く私を見上げていた。

赤茶けた短髪。男性としては低い身の丈。だけど決して華奢ではない。日々の鍛錬の賜物なのだろう。全身あますところなく鍛えられていて逞しい。

私はその力強さを知っている。

彼のやさしさ、暖かい温もりも知っている。そして、余人では背負いきれないだろう彼の理想も。

思えば無茶ばかりしていた。いつも傷ついて、それでも決して倒れなかった。理想の重さに潰されそうになりながらも、走りつづけた。

そんな彼を、いつしか愛おしいと思うようになって——
声を荒げて喧嘩をしたこともある。

互い互いを想い、それでも曲げることの出来ない思いからぶつかったのだ。あの夕焼けた世界の中で彼の在り方を罵倒し、そんな私に対して彼はもう知らないとはかりに走り去って行く。

薄く滲んだ視界の中で、だんだんと小さくなっていく彼の背中。遠くにいくにつれて心に広がった小さな波紋。

辛かった。心が痛かった。

けれど、彼も辛かったに違いない。心が痛かったに違いない。それでも彼は私を迎えに来てくれたのだ。

あの時の手の温もりを、私は忘れることはないだろう。

「――」

シロウト、そう呼んだら彼はどんな顔をするのだろうか？

言葉もなく、ただ私を見上げている彼。

やはり驚くだろうか。

けれど、今、私が言すべき言葉は決まっていた。私は、言葉に万感の想いを乗せて――

『――問おう。貴方が、私のマスターか』

そつと、それだけを口にした。

「え……マス……ター……？」

彼はオウム返しに問われた言葉を口にする。

私が何者なのか、今現在何が起きているのかが判らずに、混乱をきたしているのだろう。

でも私は知っている。貴方が何者なのかを。

「サーヴァント・セイバー。召喚に従い参上した。マスター、指示

を」

私の声を耳にした瞬間、彼が左手の甲を押さえながら苦痛に顔を歪める。

そう“令呪”が現れたのだ。

サーヴァントとマスター。

令呪が異なつた存在である私達を繋ぐ。私にとって唯一のマスターである貴方と。

「これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある――

――ここに、契約は完了した」

「け、契約つて、なんのっ!？」

今は説明している時間はない。外にはランサーが控えているのだ。私は彼に背を向けるや魔力を脚に乗せ、土蔵の外へと身を躍らせた。

「やめっ――!」

やめる。そう言おうとしたのだろう。その彼の声を背中に受けながら、出会いがしらにランサーへ聖剣を叩き付ける。

土蔵から飛び出た瞬間、待ち構えていたランサーとぶつかったのだ。

互いの宝具が相手を仕留めるべく翻る。私は振るう一撃に魔力を込め、爆発させた。

ランサーと私にはかなりの体格差があるが、そんなものは溢れる魔力で埋めてみせる。

「はあっツ!!」

上段から袈裟斬りに振り下ろす。その一撃を槍の腹で受け止めたものの、魔力爆散の影響でランサーが後退した。

間合いが開く——だが、攻撃の手を緩めるわけにはいかない。

私は彼の後を追撃するや、縦横無尽、連撃を火のように加えていく。それらの一撃をランサーが受ける度に、激しい剣戟の音と併せて火花のような閃光が散った。

「ぐっ……卑怯者め。自らの武器を隠すとは何事か——!!」

苦虫を嚙潰したような表情でランサーが悪態を吐く。

さしものランサーも、この武器相手ではやりにくいとみえる。

何せ私の持つ剣は相手の視界に映らない。文字通り見えないのだから。

——ならば、押し込む。

聖剣を下段に構えたまま肩から突進し、迫る紅撃を打ち上げた。そして、返す刃で空いた空間に一撃を放つ。

「てめえ……!!」

ランサーが更に後退するのに合わせ更に押し込んでいく。

激しく散る魔力の飛沫に合わせて剣舞のように続く連撃。それでもランサーは私の全ての攻撃を防ぎきっていた。

初見で、しかも見えない武器相手だというのによくやるものだと感心する。

だが防御に徹して防ぎきれるほど私の攻撃は甘くない。

彼が守るなら、その守りごと撃ち砕く。

私は渾身の力を両腕に込めて、相手のガードごと打ち砕くべく聖剣を振り上げた。

だが……

「調子に乗るな、たわけッ——！」

聖剣を振り下ろすのと同時に、視界からランサーが消え失せる。

「ち……！」

見失った敵の気配を直感を頼りに探り当てる。

彼は一旦後方へと飛び退り、着地と同時に弾けるようにして舞い戻って来ていた。

しかし、相手の行動が読めても私の体勢は崩れたままだ。振り下ろした聖剣は未だ地面を撃ち据えたままであり、敵であるランサーが眼前に迫っている。

ここが勝機とばかりに、必殺の一撃を繰り出すランサー。

しかし、私とてセイバーの名を冠するサーヴァントだ。

迫る一撃を円を描くようにして避けると、そのまま相手の脇腹に向かって聖剣を走らせて——

「ぐう——ッ——！」

「ぬう——っ——！」

激しい衝撃が両腕から全身へと伝わっていく。

渾身の一撃は互いの武器を打つに留まったようだ。そして、その勢いで私とランサーの間合いが大きく開く。

一瞬の静寂。

離れた間合いの中でランサーは槍を構え、じっと私を睨み据えていた。

「どうした、ランサー？ 止まっていたは槍兵の名が泣こう。それとも私から行った方がいいかな」

「ハッ！ わざわざ死にに来るか。それは構わんが、その前に一つだけ訊かせる。貴様の宝具——それは剣か？」

ランサーを射抜くように見つめる。

あの時と“同じ”問い。ならば此度の私の答えも決まっている。

「さあ、どうかな。戦斧かも知れぬし槍剣かも知れぬ。いや、もしかしたら弓かも知れんぞ、ランサー？」

私の答えを受けて、ランサーは面白そうに口端を歪め

「——はっ。ぬかせ、剣使い」

と言い放った。

次いでランサーは、僅かに槍の穂先を下げ、もう一度だけ口を開く。

「……ついでにもう一つ訊くが、お互い初見だしよ、ここらで分けて気はないか？」

私を視界に納めたまま、ランサーが私の後方へと気配を向ける。

そこには、いつの間に土蔵から出てきたのか、私のマスターたる彼が呆然と佇んでいた。

「悪い話じゃないだろ？ ほら、あそこで惚けているお前のマスターは使い物にならんし、俺のマスターとて臆病者でね。イレギュラーな事態が起きたなら帰って来いとぬかしやがる。ここはお互い

万全の状態になるまで勝負を持ち越した方が好ましいんだが……」

月明かりを全身に浴びながら、ランサーが私の答えを待っている。その間に私は、視線だけを動かして自身のマスターを捉えた。

彼は心配そうに私のことを見つめている。

先程まで自身が殺されかけていたにもかかわらず、私のことを案じているのだ。

本当に彼らしい。

私はほつつと小さく息を吐いてから、改めてランサーに視線を戻した。

「良いだろう、ランサー。その提案を受けることにする。今宵は——ここまでとしよう」

「ほう、以外に融通が利くじゃねえか。セイバーなんてどいつも堅物だと思っていたが。いや、助かったぜ」

先に私が剣を下げたのを見届けてからランサーも槍を下げた。

と思ったのも束の間、僅か一足で広い衛宮の庭の隅まで移動する。

「じゃあな。次に会う時を楽しみにしてるぜ、セイバー」

それが最後の言葉。

青き槍兵は、身軽に塀を乗り越えて夜の闇に消えて行った。

ランサーを見送ってから聖剣の存在を掌から消す。それを待っていたかのようなタイミングで、背後から駆け寄ってくる乱雑な足音が耳に届いた。

「——なんで」

足音は私の側で止まる。

それを確認してから、私はゆっくりと己がマスターを視界に納める為に振り返った。

——シロウ。

彼は私に声をかけようとして口を開こうとするが、まだ混乱しているのか、言葉を出さずに閉じる。そんな行為を繰り返していた。

……ああ。これは奇跡なのだろうか。

私の目の前に彼が、シロウがいる。

あの激闘の後、確かに別れた私の半身。もう会えないと、せめて夢の中でならと眠りについたはずなのに……彼が、今まさに私の目の前にいるのだ。

思わず彼に手を伸ばしてしまう。それにあわせて身に纏った鎧が軽い金属音を奏でた。

その音に驚いたのだろうか、彼が半歩だけ後ろに下がる。

——いけない。

私は何をしているんだ？　こんなことをしてもただ単に彼を驚かせるだけなのに……。

そう思ったものの、一度動き出した想いは止まらなかった。

駄目だ、やめろ——！

心の声に反して身体が動く。

半歩下がった彼に離されないように、一歩だけ近づいた。今度は

彼も動かない。

そして、視線が逢った。

掌が彼の頬を抱くように伸びて——気がついてみれば、私は彼をきつく抱き締めていた。ゆっくりと伸ばされた腕が彼の背中へと廻っている。

ああ、シロウが私の腕の中にいる。

シロウが、シロウが、シロウが——私の腕の中にいるのだ。

それは永遠とも思える時間。私は月光をその身に浴びながら、彼の胸に顔を埋めその温もりを感じていた。

音の無い静寂の中。密着した身体から彼の動きが伝わってくる。もしかしたら、私は震えていたのかもしれない。彼はそっと私の肩に手を置いてから、落ち着いた声で

「——なんで、泣いてる？」

はっと、彼を見上げた。間近で視線が絡み合う。

そして気付く。頬を伝う熱さに。

私は……泣いているのか？

これじゃいけないと、私は慌てて彼から腕を離し背中を向けた。

それから右腕で目元を覆ってから、改めて彼に向き直る。

今度は強く自分を律しながら。

その行為で場に緊張感が戻ってきた。彼は私の変化に戸惑いながらも疑問を口にする。

「——おまえ……何者だ？」

「何者もなにも、セイバーのサーヴァントです。シ……貴方が私を呼び出したのですから、確認するまでもないでしょう」

「セイバーの……サーヴァント……？」

何を考えているのだろう。彼の目が驚きに見開かれている。

「はい。ですから、私の事はセイバーと」

——そう、呼んでください。

「そ、そうか。セイバーだなんてヘンな名前だな……」

彼はそわそわと地面に視線を落としたり、私を横目で盗み見たりしながら、最後にぶっきらぼうにこう付け加える。

「お、俺は士郎。衛宮士郎っていつてこの家の人間だ」

シロウ。そう、貴方の名前はエミヤシロウ。魂にまで刻まれている、永遠に忘れ得ぬ愛する人の名前。

だが、じっと見つめる私の視線を勘違いしたのか、彼が慌てたように両手を振った。

「いや、違う。今のはナシだ。訊きたいことはそういう事でなくてだな、つまり……」

「知っています。貴方は正規のマスターではないのでしょうか？」

「え……？」

「しかし、それでも貴方は私のマスターです。契約を交わした以上貴方を裏切りはしない。そのように警戒する必要はありません」

「い、今……なんて？ マスター？」

話にまったく付いていけないのだろう。シロウが口籠もっているのが分かる。

けれど無理もない。命を狙われて、死にそうになって、窮地を助けてくれたとはいえ私は見も知らない不審者なのだ。すんなりと事態を受け入れる方がおかしい。

「ち、違うぞ。俺マスターなんて名前じゃない」

「それでは、シロウと。ええ、私としてはこの発音の方が好ましい」
「なっ……………っ!!」

彼の顔が赤くなったのが分かった。

名前を呼ばれたのが恥ずかしかったのだろうか。何だか、そういう仕草は見ていて微笑ましく思える。

「ちょっと待って！ 何だってそっちの方を……………て、痛っ——
—なんだ、これ。あ、熱くなってる……………！」

信じられない物を見つけたとばかりに、シロウが左手の甲を凝視している。

確認しなくても分かる。そこには刺青のような紋様が刻まれているはずだ。

「それは令呪と呼ばれるものです。私達サーヴァントを律する三つの命令権でありマスターとしての命でもある。無闇な使用は避けてください、シロウ」

「セ、セイバー？」

「シロウ。外に……………」

一瞬、口籠もる。

敵——そう、今は“まだ敵”のはずだ。

「外に敵が二人います。この程度の重圧ならば問題ない相手ですが、放っておく訳にはいかないでしょう」

「……外に敵だって？　ちょっと待て。おまえまだ戦うつていうのか！？」

「向かってくるのなら応戦はします。とりあえず外に出ませんか、シロウ」

こうして私は、想像すらしていなかった、自身三度目となる聖杯戦争に身を投じることになったのだ。

第二話

屋敷から出た私達を待ち受けていたのか、十メートル程の距離を挟んで二人の人物と対面することになった。

青年と少女のペア。

勿論、今の私は彼等が何者であるかを知っている。

真紅の外套を纏った青年は、私と同じくサーヴァント。クラスはアーチャーだ。前回の聖杯戦争の折り、彼は“この場”で負傷し、以降は傷の回復を優先した為あまり私との接触は無かった。

故に彼に関しての情報はあまり持ち得ていない。

短く刈り込まれた白髪。ランサーにも負けない長身。無駄な鍛えられ方は一切していないのだろう。褐色の肌と相まって彼を見る者に精悍な印象を抱かせる。

何処か懐かしい雰囲気を漂わせる武人。私はそう感じていた。

もしかしたら、生前は私と縁のあった騎士だったのかもしれない。敵だったのか味方だったのか定かではないけれど、彼とてサーヴァント。英霊であり英雄なのだ。

だからなのだろうか。アーチャーは私のことを驚いたような視線で見つめている。

そして、彼の側にいる少女が、アーチャーのマスターである遠坂凛。

五大元素使いと呼ばれる卓越した魔術師であり、聖杯戦争のマスターとしての資質を高いレベルで兼ね備えている。明朗快活な性格で、とても気持ちの良い少女だ。

私は彼女のことをとても気に入っている。

しかし現状を鑑みて“敵対”する可能性がない訳ではない。いや、以前は私がアーチャーを切り伏せた為に共闘したが、今回は彼が健在なのだ。基本的に聖杯戦争は七組のマスターとサーヴァントによ

るサバイバルゲーム。

今すぐにも戦いに発展することだってあり得る。

私はアーチャーを牽制する為に一歩だけ前に出た。手には再び現した聖剣を握り込んでいる。

「――マスター、指示を」

アーチャーは帯剣こそしていないものの、マスターを守るような位置に身を置き私を見据えていた。彼の後ろにいる凜は、静かに事態の推移を見守っている様子だが、正直に言えば戦いたくない相手ではある。

「……止めてくれ、セイバー。正直に言って俺はまったく事態に付いていけない。それに、おまえが敵って呼んだあいつ――俺の知ってる奴なんだ。そいつを襲わせるなんて出来ない」

やはり、彼ならそう言うと思った。

だが……。

「シロウ。彼女はアーチャーのマスターだ。今はまだ私達の敵なのです」

「そんな事は知らない。だいたいマスターだサーヴァントだって、俺には全然解らないんだ。理解して欲しいなら説明するのが筋じゃないのか？」

「それは……そうですが」

そのやり取りを聞いていたのだろう。

アーチャーを押し退けるようにして彼女が前に出てきた。

「ふうん。つまりそういうコトなんだ。へえ……素人のマスターね」

鈴を転がすような響きの良い声音。

シロウは、前に出てきた彼女を驚愕の表情で見つめながら、その名前を呟いた。

「遠坂——凜」

「あら？ 私のこと知ってるんだ。なあんだ。なら話しは早いわよね、衛宮くん？」

「な……」

場にそぐわない明るい口調に、一触即発の雰囲気が一気に軟化する。

私ですら拍子抜けしてしまう程なのだ。シロウなんて金魚みたいに口をパクパクさせて目を丸くしている。

そんな彼の様子は、少し、可笑しかった。

「知ってるって……そりやおまえ学園の有名人だし……じゃなくてっ！ 遠坂、おまえは……！」

「そう。貴方と“同じ”マスターよ。つまりは魔術師ってことになるわね。あなたも魔術師なんだし隠す必要もないでしょう？」

「ま、魔術師だってっ？ 遠坂、おまえ、魔術師なのか……！？」

シロウの言葉を受けて、彼女の柳眉が不機嫌そうに寄った。それに危機感を感じたのか、シロウが慌てて弁解を始める。

「あ、いや、違うんだ。俺の言いたいことはそういうことじゃなくてだな……つまり……」

「……そう。色々と納得いったわ」

彼女は思い切り嘆息してから、背後に控えるアーチャーを振り仰

いだ。

「アーチャー。悪いけどしばらく消えててくれるかしら。私、ちょっと頭にきたから」

「……解らないな、凜。頭にきたとはどういうことだ？」

「言葉通りの意味よ。アイツに現状を、自分の立場を思い知らせてやらないと気がすまなくなったの。貴方がいたらセイバーだって剣を収められないでしょ？」

「確かに。敵であるサーヴァントを前にしては、悠長に話し込んで無理はないだろう」

「でしょ？」

「ふう。君にも困ったものだ。言い出したら聞かないのは分かっただけだが……命令とあれば従うしかあるまい。だが、一つ忠告すれば、それは余分な事だと私は思うがね」

やれやれと苦笑しながらも、アーチャーは彼女の言う通りにその存在を消していく。霊体であるサーヴァントは、姿を消しマスターの傍に控えることができるのだ。

その光景——アーチャーが消える様子を間近で垣間見たシロウは、驚愕のあまりか身体が硬直している。そんなシロウの様子など気にならないとばかりに、凜はシロウの真横を通り過ぎつつ衛宮の家に向かって歩み始めた。

「話しは中でしたしよ。どうせ何も解ってないんですよ、衛宮くんは。安心してね。嫌だって言っても全部教えてあげるから」

「待て遠坂っ！ 勝手に話進めて——一体なに考えてんだ、おまえ……は……！」

凜の理不尽な行動に業腹したのか、シロウが彼女の肩を取って歩みを止める。けれど、振り向いた彼女の表情を見て、どうやら氷つ

いてしまったようだ。

何故なら、彼女は先程までの笑顔とは違うまったく別の表情をしていたから。

「衛宮くん？ 突然の事態に戸惑うのは分かるけれど、素直にその事態を認めないと命取りつて時もあるの。ちなみに、い・ま・が！ その時だって分かって？」

「だ……だけど……」

「——死にたいのかしら、衛宮くんは？」

「……………」

「はい、分かればよろしい」

シロウの沈黙を肯定と受け取った凜に笑顔が戻る。それから、改めて私の方へと視線を向けてきた。

「それじゃ行きましょうか。貴女もそれでいいでしょセイバー？ 貴女のマスターに色々と教えてあげるんだから」

確かに、私が説明するよりも凜が説明する方がシロウには理解しやすいだろう。それに、今はまだシロウと顔を合わせて冷静でいられる自信もない。

私とて突然の事態に動揺しているのだ。

「はい。貴方がマスターの助けになる限りは控えています」

私と凜。並んで衛宮家の門をくぐる。

その場に一人取り残された彼は

「なんでさ。なんであんなに怒ってるんだ、あいつ……」

と、しばらく呆然と佇んでいた。

『——“Minuten vor Schweiben”……』

凜の呪を詠む声が衛宮家の居間に響いている。その効果を受け、畳の上に散乱していたガラスの破片が組み合わせり、復元を開始した。

一連の光景を呆然と見つめているシロウ。

同じ魔術師でも凜とシロウでは方向性が違う。

「——凄いな、遠坂。俺にはそんなこと出来ないから、直してくれて感謝するよ」

「え？ 出来ないって……そんなことないでしょ？ こんな魔術の初歩の初歩じゃない。ドコの学派でも同じでしょ？」

「そうなのか。けど俺は正式に教わった事がないから、基本とか初歩とか知らないんだ」

ピタリと、凜の動きが止まった。

あれは予想外の出来事に戸惑っているのではなく、何故だかわからない怒りを押し殺しているのだろう。

「……ちよつと待つて。じゃあなに、衛宮くんは自分の工房の管理も出来ない半人前ってことかしら？」

「工房？ そんなの持つてないぞ、俺」

「……えつと、なに？ じゃあ、本当に貴方、素人？」

「そんな事ないぞ。強化の魔術くらいは使える」

「強化つて、また随分と半端なのを使うのね。で、それ以外はから

つきし駄目なワケ？」

おう、と横柄に頷くシロウ。

これは……そろそろ“きそう”ですね。

危険を感じ取った私は、凜とシロウから少し距離を取った。

そしてやはり

「——な、なんだってこんなヤツに、セイバーが呼び出せるのよおおっツーーーーー！」

夜の深山に、凜の嘆きにも似た絶叫が響き渡った。

聖杯戦争とは、どのような願いでも叶える万能の器——聖杯を巡ったサバイバル・ゲームである。

マスターとは等しく魔術師であり、彼等が聖杯の助けを借りて呼び出されるのがサーヴァントと呼ばれる英霊達だ。マスターはサーヴァントを使って他のマスターを駆逐し、聖杯を得るのが目的となる。

そこで行われるのは、文字通りの殺し合い。

「私が教えてあげられるのは、貴方がもうマスターで戦うしかないってことなの。サーヴァントは強力な使い魔だからうまく使いなさいってことだけよ」

凜の説明は淀みがなく、整然としていて解りやすい。

聖杯戦争に対して何の知識もないシロウでも、よく理解できるような丁寧な説明だった。

「それが聖杯戦争という儀式のルール。貴方が選ばれたものの本質なの」

衛宮の家に私とシロウ、それに凜がいる。状況こそ違えど、こうして三人でいる空間にとても懐かしいものを感じた。

あの時は聖杯戦争に勝つことばかり考えて、この雰囲気を楽しむ余裕はなかったけれど、改めてこの場所を鑑みればとても暖かいものを無碍に放り出していたのだと実感する。

「それに衛宮くんだって、本当のところは理解しているんじゃない？　だって、一度ならず二度までもサーヴァントに殺されかけたんだから」

「……………」

「ああ、殺されかけた——じゃないわね。だって衛宮くん。学校で実際に殺されたんだもの」

淡々と続いていく凜の説明に、シロウも自身の置かれた立場を理解し始めたようだ。

しかし、凜の思わぬ言葉を呼び水に、シロウが疑問の声を差し挟む。

「ちょっと待ってくれ。遠坂、俺がランサーに殺された事を知っているのか？」

「——ッ！？　やば……少し調子に乗りすぎたか」

目を見開いて驚き、自分の失言を後悔する凜。

シロウは“どうしてその事実を彼女が知っているのか”それが気になったのだろう。しかし凜は、そんなシロウの疑問をキツパリと否定した。

「……ただの推測よ。つまんない事だから忘れなさい、衛宮くん」
「つまんない事じゃないぞ。俺はあの時、確かに命を助けられた。
本当なら死んでいたところを“誰か”に助けられたんだ。それを知
ってるってことは――」

「いいからっ！ そんな事より今はもつと知らなきゃいけない事があるでしょっ！」

無理やりに話しを捻じ切って凜が説明を再開する。その剣幕に押されたのか、シロウも不承不承ながら話しの続きを聞くことにしたようだ。

それからしばらく、二人のやり取りだけが続いていく。そして、話が一段落したところで凜が立ち上がった。

「さあて、話しも纏まったところで、そろそろ行きましようか」

「ん？ 行くって何処へさ？」

「もちろん、貴方が巻き込まれた“聖杯戦争”をよく知っているヤツに会いに行くのよ」

「え？ こ、こんな時間からかつ！？」

シロウが時計で時刻を確認している。

説明を開始してからかなり時間も経っている。もう深夜といって良い時間帯だった。

「そうよ。今からでも急げば夜明けまでには戻ってこれるんじゃないかしら。明日は休日だし、別に夜更かししても問題ないわよね？」

「いや、そういう問題じゃなくってだな……」

シロウがチラチラと私に視線を送っているのが分かる。
言うべきか、言うまいか。

しかし逡巡はさほど続かず、彼は困ったように嘆息してから口を開いた。

「……だいたいセイバーが困るだろ？ セイバーって昔の英雄なんだろ？ なら現代のことなんて分らないことだらけのはずで、そこから説明するのが筋じゃないか。違うか、遠坂？」

ああ、そういう事ですかシロウ。
私は一度大きく頷いてから

「いいえ、シロウ。私達サーヴァントは人間の世であるのなら、あらゆる時代に適応します。ですからこの時代のこともよく知っている。それに、この時代に呼び出されたのは初めてではありませんから」

「なっ——！？」

「嘘……？ どんな確率よ、それ……！？」

二人が絶句している。

そう。私がこの時代に来るのは“三度目”だ。

「初めてじゃないって、本当か、セイバー？」

「ええ。その通りです、シロウ」

本来なら二度とあるはずのない奇跡。

暁に彩られた世界で、別れを告げたはずの貴方に出会えた奇跡。

「……セイバー、おまえ……」

「じゃあ、問題ないワケね、衛宮くん」

彼の声を掻き消すタイミングで凜が声を挟む。その為にシロウが

何と言ったのか正確には聞きとれなかった。彼も大した用件ではなかったのか、不満の色を滲ませながら凜の方へと顔を向けてしまう。

「分かった。行けばいいんだろ、行けば。それで何処に行こうってんだ遠坂？」

「隣町にある教会よ。そこにこの聖杯戦争を監督してるヤツが居るのよ」

「監督……？」

「そ。行けば分かるわよ」

凜が不敵な笑みを浮かべ、じーっとシロウを見つめていた。あれは何も知らないシロウを振り回して楽しもうという表情ですね。

今度私もやってみましょうか。

その表情から何かを感じ取ったのか、シロウは怯えたように凜からそつと視線を逸らしていた。

夜の冬木の街をシロウと凜と共に歩く。

時刻は深夜。寒く冷たい空気と相まって、出歩いている人影は私達以外には見当たらない。明るい月の光だけが私達を照らしている。静寂に満ちた世界。

それでも彼は用心の為にと――

……はあ。

半ば予想はしていましたが“また”これを着ることになるなんて。

鎧を脱がないと言う私に、シロウが用意したのはいつかの黄色いレインコート。思わず抗議の意味を込めて無言になってみたりもしましたが、果たしてシロウに如何ほどの効果があるのか。

じーと視線で圧力でもかけてみましょうか。

「こっちから行こう」

「え？ 何処に行くのよ衛宮くん？ そっち、道が違っわよ」

「隣街に行くんだろ？ ならこっちから橋を通った方が近道だ」

任せろというシロウの言葉を受けて、川沿いにある公園を目指して歩いている。

公園から橋を渡って新都に行こうというのだ。

「へえ、こんな道があつたんだ。そっか、新都には橋から行けるんだから公園を目指せばいいのよね」

公園に着いた途端、凜が辺りを見回しながら弾んだ声を上げている。その声に釣られた訳ではないが、私も辺りを窺ってみた。

深夜、私の視界に映る公園は、何時か見た光景を思い出させる。

そうだ。私はこの場所で——自身の半身を見つけたのだ。

忘れようとしても、忘れることは出来ない。

あの時、彼に手を引かれ家路に着こうとした時に突然現れた災厄。想像すらしなかった第八のサーヴァント出現。

『待たせたな、セイバー。約束通りこうして迎えに来てやったぞ』

頷くわけにはいかない。

結果として戦うことになった私は——

『いいだろう。では——力ずくだ』

襲いくるエアの咆哮。

あの黄金のサーヴァントとの死闘に私は——敗れたのだ。

まるでゴミ屑のように撃ち捨てられてもどうすることも出来ない。それほど圧倒的な力の差がギルガメッシュと私の間にはあったのだ。

——悔しかった。

——自分が情けなくて泣きそうだった。

だって、私が倒れるということは、シロウを守れないということなのだから。

そんな彼もまた、ギルガメッシュの凶刃に倒れ、真っ赤な血の海で沈んだ。

敵うはずもないのに。届くはずもないのに。シロウは“私を失わない”為に戦ってくれたのだ。その行為に私は恐怖した。切なくて心が碎けるかと思った。だって、私は、私が消えることよりもシロウがいなくなる方が嫌だったのだ。

瞳を閉じればあの時の光景が鮮明に蘇ってくる。

視界は血で赤く染まり、声はか細く、それでも必死になって叫んだ。

『もう無理だと、どうして判らないのです……！』

私の声を振り払い、傷ついて、血まみれになって、死にそうに呻きながらも、それでも戦おうとした。

『いらないっ！ 貴方の助けなどいりませんっ！ 私は……既に貴方の剣ではないんです……！』

彼は流れ出る鮮血もお構いなしに、絶望ともいえる相手に突き進んでいた。

『やだ、止めてくださいシロウ！ それ以上はダメだ……！ 本当

に、本当に死んでしまう。こんな、こんな事で貴方に死なれたら、私は――」

罵倒しても、懇願しても、哀願しても、彼はその歩みを止めよう
としない。
うるさいと。黙ってろつと。そうしないと大事なものを失うから
と。

『俺には、セイバー以上に欲しいものなんて、ない――』

シロウの心を感じる暖かい言葉だった。

そして激闘は、一つの“奇跡”によってその幕を閉じる。
その末に辿り着いた一つの真実。

――やっと気づいた。シロウは、私の鞘だったのですね。

「――」

冷たい冬の木枯らしが、そつと頬を撫でていく。

私はゆっくりと目を開いてから視界に彼の姿を搜した。

当のシロウは、私の少し先を歩いていたが距離が開いたのに気付いたのだろう。立ち止まって私を振り返っている。

「いいから、もう行くぞ。別に遊びに来たわけじゃないんだから」

叫ぶ彼の後を小走りに追った。

橋を越えれば新都へ至る。とはいえ目的の教会まではまだ少し時間がかかるだろう。

なら、少しだけ、あの時のことを思い出していよう。幸いフードに隠れて、私の顔は二人には見えないのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3492ba/>

Fate/stay night ~ その時聖杯に願うこと

2012年1月10日00時50分発行